香芝市埋蔵文化財発掘調査概報23

―平成18年度―

2007. 3

香芝市教育委員会

序　　文

香芝市は奈良県の北西部、『万葉集』にもうたわれた二上山の麓に位置します。古代から大和と河内を結ぶ交通の要衝として栄え、市内には旧石器時代からの貴重な遺跡が数多くあります。市内には近鉄大阪線、同南大阪線、ＪＲ和歌山線の３本の鉄道が通り、道路においても西名阪自動車道が通るなど、交通の利便性から市内全域で開発が進み、人口増加の一途をたどっています。そして、平成３年10月には香芝市として市制施行しました。なお、文化財行政においては平成４年４月に二上山から産出するサヌカイト、凝灰岩、ざくろ石をテーマにした二上山博物館をふたかみ文化センター内に開館し、毎年特別展や企画展を開催するなどして市内の文化財の公開につとめております。また、今も増え続ける開発事業にともなう埋蔵文化財の届出件数も多く、事業者のご理解を得ながら調査等をすすめております。

さて、今回はＪＲ志都美駅の西側で土地区画整理事業が計画され、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれていませんでしたが、事業面積が１万㎡をこえることから遺跡有無確認踏査願を提出していただいて踏査したところ、土器などの遺物が採集されました。そこで、このたび事業着手前に確認調査を実施する運びとなりました。

今後も市内各地でこのような事業が計画されることと思います。文化財行政が円滑にすすむことを願い、皆様方のご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成１９年３月

香芝市教育委員会

教育長　山　田　勝　治

例　　言

1．本書は、平成18年度において香芝市教育委員会が国庫・県費補助事業（事業名：市内遺跡発掘調査事業）として実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は香芝市が事業主体となり、香芝市教育委員会事務局生涯学習課が実施した。
3．発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録、および出土遺物は香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山１丁目17番17号）で保管している。
4．本書に掲載した実測図の水準は海抜高である。
5．発掘調査作業及び遺物整理作業は株式会社アイデイエイに委託した。

目　　次

発掘調査位置図 …… 1
未命名散布地 …… 2
Ⅰ　調査の契機と遺跡の環境 …… 2
Ⅱ　調査の概要 …… 3
1　調査の目的 …… 3
（1）Aトレンチ …… 4
（2）Bトレンチ …… 7
（3）Cトレンチ …… 7
（4）Dトレンチ …… 7
2　出土遺物 …… 7
Ⅲ　まとめ …… 9

第１図　発掘調査位置図（Ｓ＝１／２５,０００）

平成18年度市内遺跡発掘調査事業に伴う調査地

遺　跡　名	調査次数	調　査　地　番	調　査　期　間	調査面積
未命名散布地	第１次	上中140－2他	平成19年２月26日 ～３月９日	400㎡

未命名散布地

Ⅰ　調査の契機と遺跡の環境

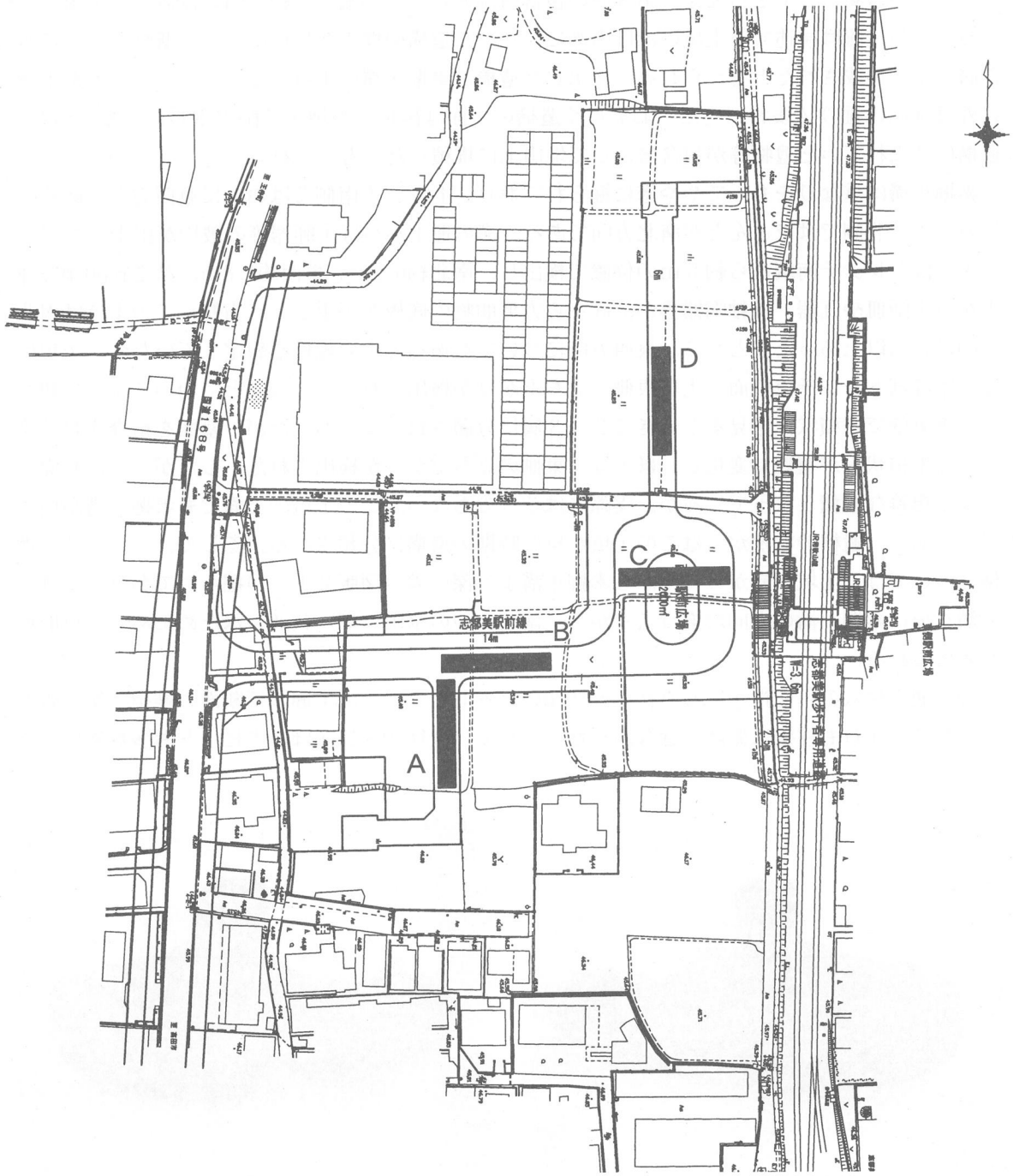
今回の調査は大和都市計画事業 志都美駅西土地区画整理事業として、ＪＲ和歌山線志都美駅の西側で駅前広場の整備を伴う区画整理事業が計画されたことに始まる。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地には含まれていなかったが、開発面積が１万㎡（約12,000㎡）をこえることから、平成18年９月27日付け香区第127号で香芝市長 先山昭夫氏より「遺跡有無確認踏査願」が提出され、平成18年９月27日付け香教生第285号で奈良県教育委員会教育長あてに進達し、平成18年10月４日付け教文第405号で県教育委員会から「遺跡有無確認踏査願いについて（依頼）」があった。その後、市教育委員会が平成18年10月25日に現地踏査を行い、踏査依頼地全域において須恵器や土師器、サヌカイト等の細片が散布していたことから、県教育委員会に対して平成18年10月27日付け香教生第304号で「遺跡有無確認踏査の結果について（報告）」として、踏査地を中心に「遺物散布地」として遺跡地図に掲載することが望ましいと報告した。そして、平成18年11月13日付け教文第405号で県教育委員会から「事業実施にあたっては、事業着手前に試掘調査が必要と考えられます」との回答を得た。そこで、事業を担当する香芝市都市整備部区画整理課と現地調査の協議を行い、平成19年２月下旬から試掘調査を行うことになった。ただし、調査方針としては仮に遺構が検出されても完掘せず、遺構の有無を確認するにとどめ、調査区を拡張して本調査で遺構の性格や正確な時期を把握することにした。

調査地は『日本書紀』推古天皇15年（607）条に「是歳の冬に、倭国に、高市池・藤原池・肩岡池・菅原池を作る。」とある中で、肩岡池の可能性が考えられる分川池の東約1.3㎞に位置する。分川池は聖徳太子が築いた伝承をもち、この分川池から東の平野部へ水を引いた水路の痕跡が調査地の南約200ｍにおいて東西方向に残っている。聖徳太子が築いた伝承をもつ池は市内に分川池のほか旗尾池があり、これらの池の水を引いて米を収穫する地域の人々は太子講をつくり、毎年収穫の一部として供米等を法隆寺へ納めている。調査地周辺は太子講の中心地域であり、仮に聖徳太子が築いたとする伝承をもつ分川池が推古紀にみえる肩岡池であるとすれば、この地域は推古朝以降に開発された地域であると考えられる。このことについては、今の太子講の範囲にある遺跡の分布をみれば、調査地の北西約800ｍの丘陵に６世紀末～７世紀初頭から築造され始め、７世紀後半まで築造されたと考えられる平野古墳群や平野窯跡群、さらに、調査地の北約１～1.2㎞には７世紀前半から後半にかけて築造された尼寺廃寺南遺跡と尼寺北廃寺があるが、５～６世紀前半にさかのぼる遺跡は現在のところ確認されていない。なお、調査地の南約1.8㎞にも６世紀後半～７世紀初頭にかけて築造されたとされる藤山古墳群があって、ここにも太子講が及んでいることから、この地域においても６世紀中頃以降に開発されたことが推測される。しかし、古墳の構造は平野古墳群が巨石を用いた横穴式石室から横口式石槨へと変遷するのに対し、藤山古墳群はやや小さな石材を用いた横穴式石室から石棺直葬、そして、小さな石材を用いた小型の横穴式石室へ変遷することから、古墳築造にかかわった氏族が異なることは明らかであろう。いずれにしても、この地域が６世紀代から人々が居住して治水し、開発されていったと考えられる。

Ⅱ　調査の概要

1　調査の目的

今回の調査は遺跡有無確認踏査によって遺物が採集されたことから、地下遺構の有無と本調査が必要となった場合の調査期間と経費算定のための資料を得ることを目的に実施した。調査は幅４m、長さ25mのトレンチを４ヶ所設定し、おもに重機で掘削した。現地調査は平成19年２月26日から同年３月９日まで実施し、実働は９日、調査面積は400㎡である。



第２図　トレンチ配置図

（1）Aトレンチ（第3図）

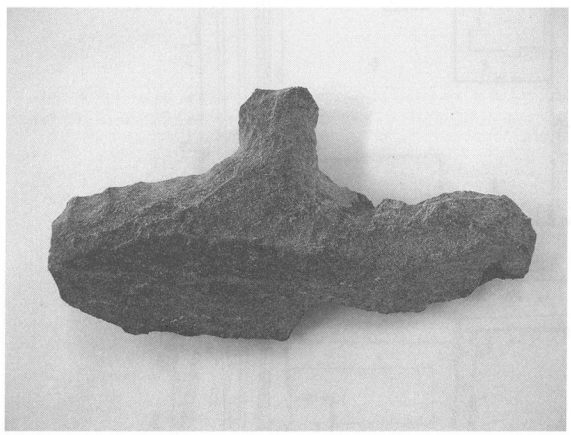
事業地南西部の道路予定地で南北方向に4m×25mのトレンチを設定した。層序は第1層が表土（耕作土、10YR3/1～4/1　黒褐～褐灰色土、層厚約20cm）第2層が水田床土（10YR5/2　灰黄褐色土、層厚約10cm）、第3層が包含層（2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土、層厚約8cm）、第4層が地山（10YR7/2～7/3　にぶい黄橙色粘質土）である。

第2層は約1～3cmの厚さで何層かに分層できるが、耕作の深さによってできたものであることから1つの層としてとらえた。第3層の包含層はトレンチ南端から約5mの位置から堆積している。この位置は後述する土坑のほぼ南端にあたり、遺構の埋土が耕作によって遺物とともに包含層として形成されたと考えられる。検出した遺構は素掘小溝や土坑、ピットなどで、素掘小溝以外は地山に掘り込まれていた。おそらく遺構の上面は後世の整地等で削平されたと考えられ、遺構に含まれていた遺物等が包含層として地山上に堆積したと考えられる。

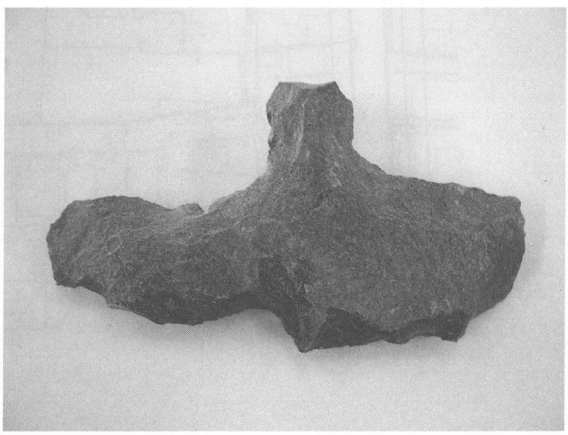
素掘小溝は重なりをもってやや密に掘られており、トレンチ南側ではおもに東西方向であるのに対して、北側ではほとんどが南北方向である。溝の埋土からは土師器等の破片が出土した。

土坑はトレンチ南端から約5mの位置で検出し、南北約6.2m、東西約1.8m、深さ約80cmで埋土から土師皿や瓦器、緑釉陶器等が、底から方形曲物の底板が出土した。当初、この土坑は南北方向に6m以上あったことから、東西方向についてもある程度の規模を想定していたが、予想に反してほぼトレンチ東壁面で土坑東側の立ち上がりが検出された。このことについては、当初トレンチ東壁で堆積状況を見ると大きく2～3層に分層されそうであったが、壁面を精査すればするほど堆積状況が複雑に変化し、ほどなく東側の立ち上がりが検出された。したがって、断面図で少し複雑な堆積となっているが、実際にはそうでもない。この土坑の上面でも素掘小溝が検出されており、遺構の状況からはこの土坑が早い時期の遺構に分類される。そして、この土坑の性格については、土坑に向かって西から素掘小溝より深い溝（図版2下）が掘られており、ほぼこの溝を境に素掘小溝の方向が違うことから、南北2つの水田（畑）共通の水だめであった可能性が考えられる。

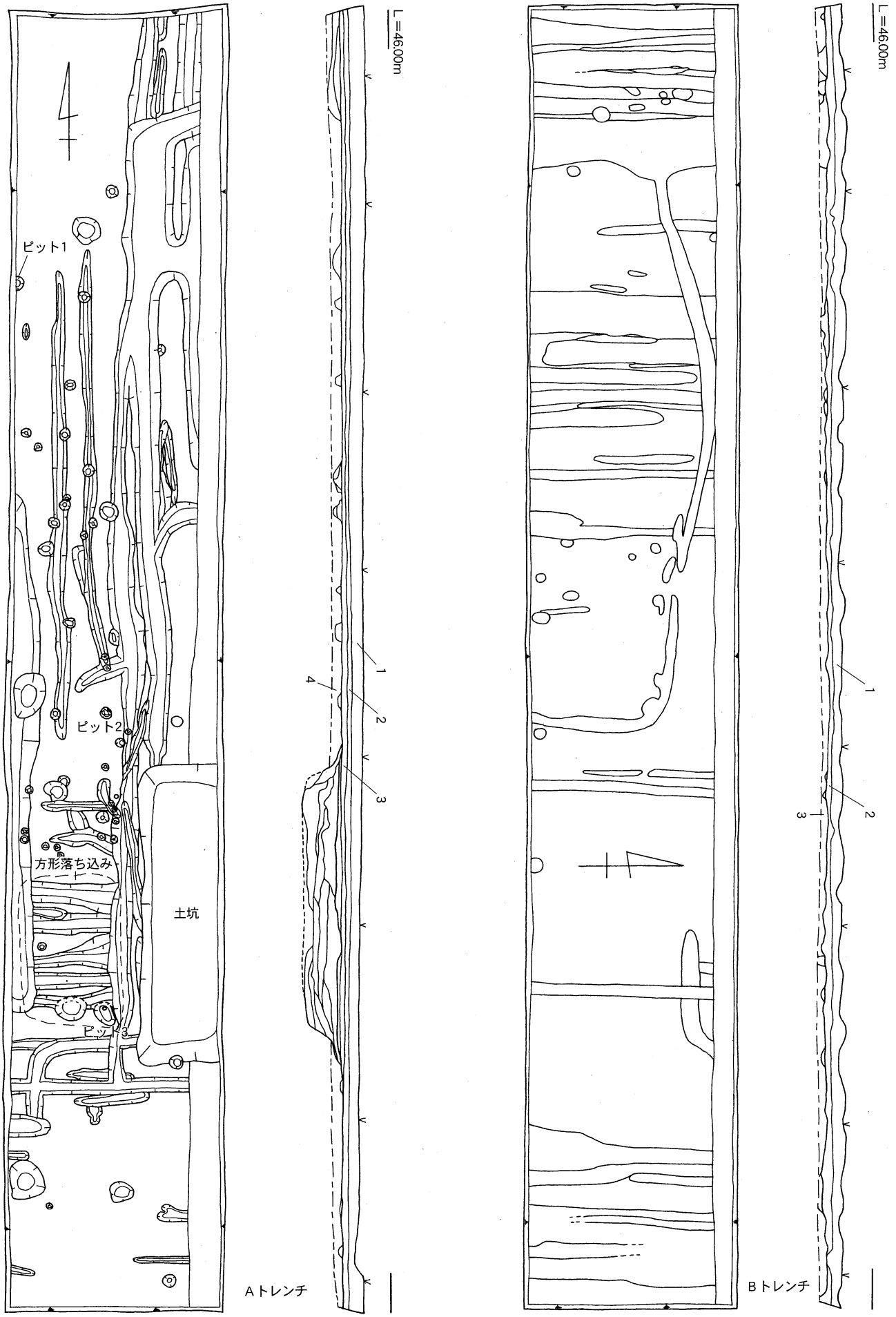
その他、柱穴の可能性がある直径40～80cmのピットについては半掘して断面の堆積状況を観察したが、いずれも柱痕は確認できなかった。そして、直径10～15cmほどのピットも多数検出した



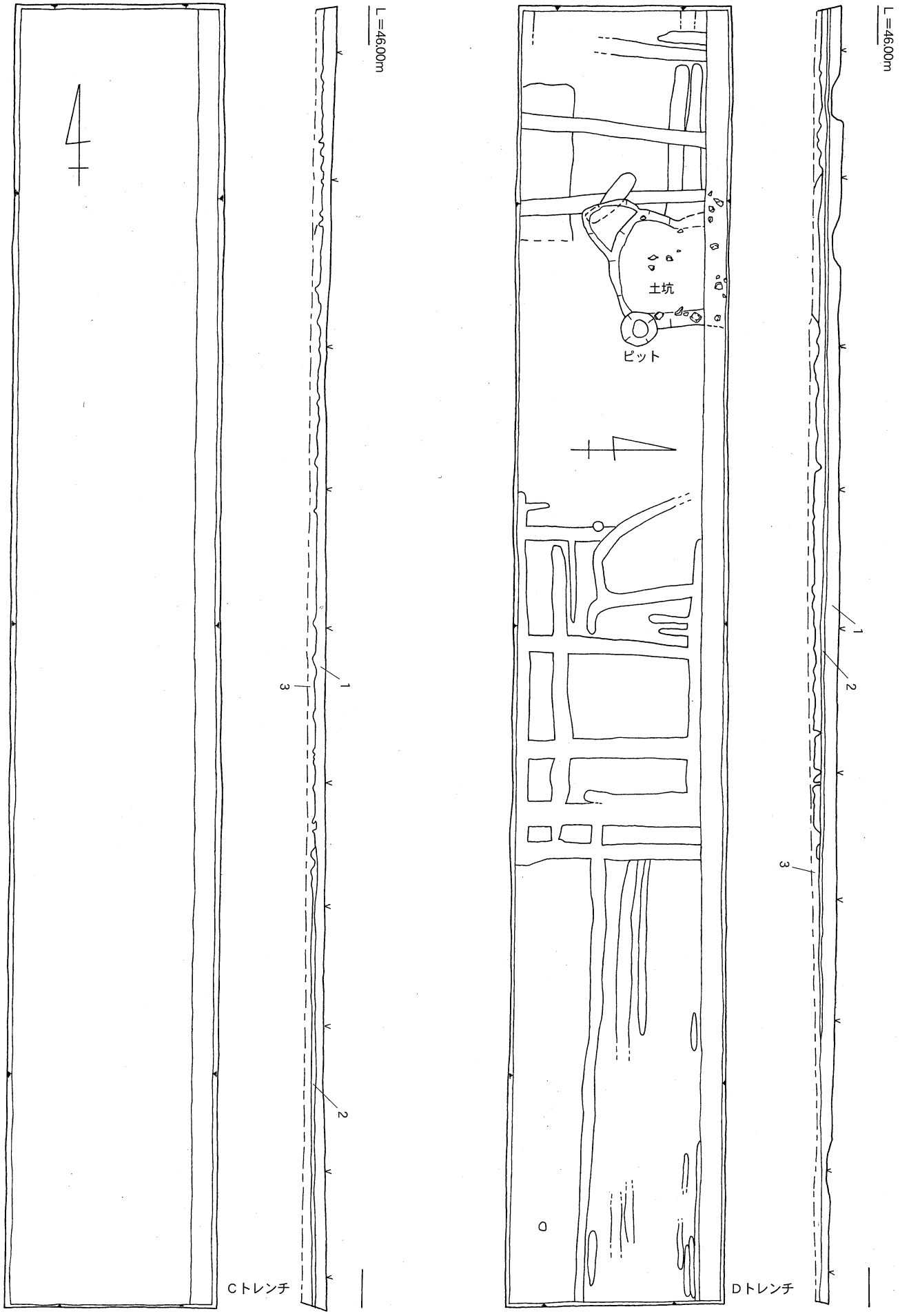
Aトレンチ包含層出土石匙



同



第3図　A・Bトレンチ実測図（S＝1／100）



第４図　Ｃ・Ｄトレンチ実測図（Ｓ＝１／１００）

が、水田耕作に伴う杭の痕跡と考えられる。以下、特徴のあるピットについて述べる。

ピット１はトレンチ北端から約５ｍの位置でトレンチ西壁にかかって検出した。直径約25cm、深さ約12cmで、埋土から瓦器椀が破片となって２～３個体分出土した。

ピット２はトレンチのほぼ中央付近で検出し、直径約18cm、深さ約９cmで底に最大幅約10cmの扁平な石を置いていた。この状況から柱穴と考えられるが、これ以外に同様のピットはない。

ピット３（図版３下）は土坑西側の素掘小溝とその下層で検出した深さ約20～30cmの方形落ち込みを掘り切った段階で検出した。15cm×25cm、深さ約22cmで底から完形の土師皿が出土した。

（２）Ｂトレンチ（第３図）

駅前広場から国道168号線に向かう道路予定地において、Ａトレンチの北側をほぼ西端として東西方向にトレンチを設定した。層序はＡトレンチとほぼ同じであり、第１層が表土（耕作土、10YR4/1　褐灰色土　層厚約20cm）、第２層が包含層（2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土、層厚10～20cm）、第３層が地山（10YR7/3～6/3　にぶい黄橙色粘質土）である。

遺構はすべて地山面で検出したが、素掘小溝とピットのみである。なお、トレンチ中央から西側にかけてやや弧状の溝を検出したが、下層の素掘小溝を切って掘られていることから、少し違った土地利用が想定される。

（３）Ｃトレンチ（第４図）

ＪＲ志都美駅西側の駅前広場予定地で東西方向にトレンチを設定した。西側から重機で表土を掘削したところ、表土（耕作土）直下で地山が検出され、遺構はまったく検出されなかった。なお、このトレンチ掘削中に近所の方が来られ、「かつてこの付近の水田で瓦の原料となる粘土を採掘した」とのことであった。なお、トレンチ東端から９ｍにわたって水田床土を検出したが、その下層においても素掘小溝は検出されなかった。層序は第１層が表土（耕作土、10YR4/1　褐灰色土　層厚20～25cm）、第２層が水田床土（10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土）、第３層が地山（10YR7/3～7/4　にぶい黄橙色粘質土）である。

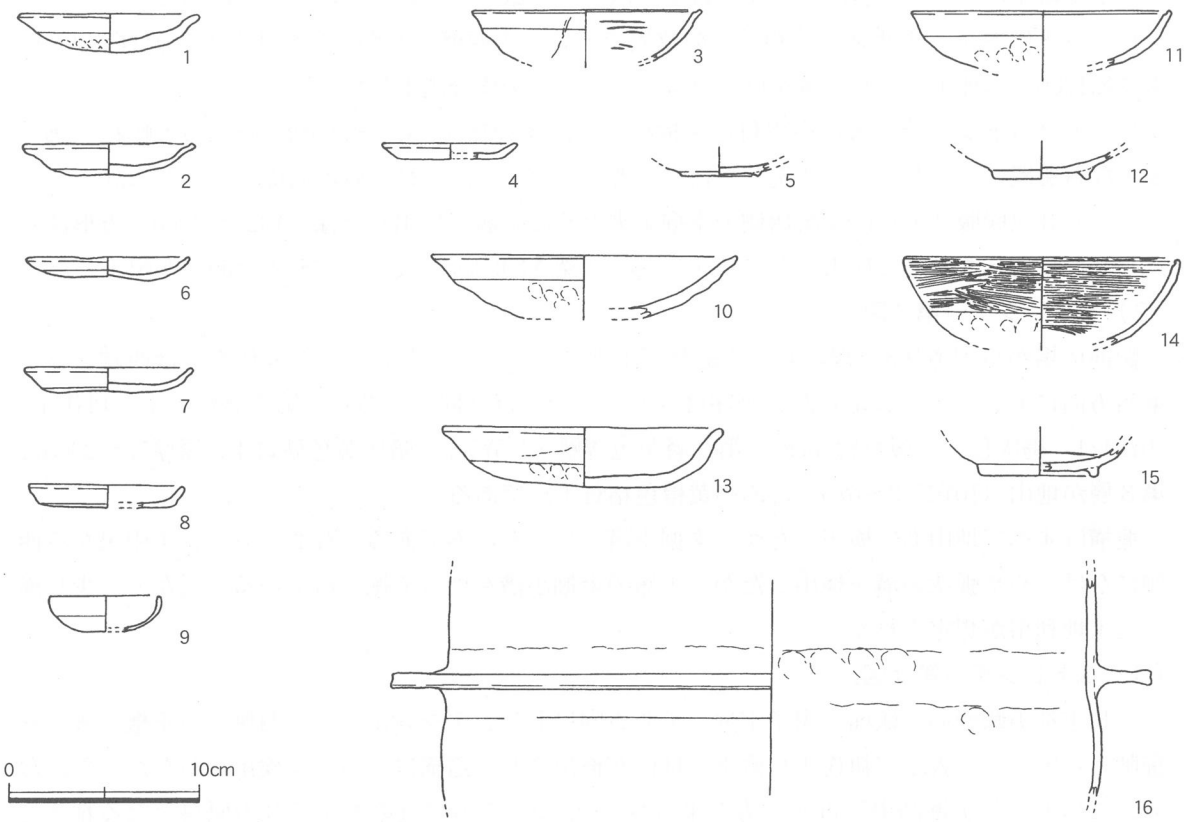
（４）Ｄトレンチ（第４図）

事業予定地の北東部分の道路予定地において南北方向にトレンチを設定した。層序は第１層が表土（耕作土、10YR4/1　褐灰色土　層厚20～25cm）、第２層が水田床土（10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土）、第３層が地山（10YR7/3～7/4　にぶい黄橙色粘質土）である。

このトレンチも南から約５ｍは粘土採掘によって表土直下で地山が検出され、わずかに素掘小溝が検出されたのみであった。中央から北側では素掘小溝や土坑、ピットが検出された。しかし、全体に遺構は希薄である。土坑は南北約２ｍ、東西２ｍ以上の不整形で、中層から底にかけて８～10cm大の石と土器片１点が出土した。石の中には焼けたものもある。ピットは土坑の南西隅にあって北半分は土坑に切られているが、直径約70cm、深さ約10cmである。遺物は出土しなかった。

２　出土遺物（第５図）

遺物は各トレンチにおいて出土したが、Ａトレンチからは遺構が多く検出されたこともあってもっとも多く出土した。包含層や素掘小溝の埋土から縄文時代と考えられる石匙や飛鳥時代の須恵器杯蓋片等も出土したが、今回の調査地において検出した遺構の時期を確定できる遺物を中心に記述する。



第５図　出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

１はＡトレンチの上層で検出した素掘小溝から出土した土師皿で、口径9.5cm、器高2.0cmで内外面とも橙色を呈す。調整は内外面ともユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精良で直径0.5～４㎜の長石を含む。

２はＡトレンチの方形落ち込みの下層で検出したピット３から出土した土師皿で、口径8.8cm、器高2.3cmで内面は赤褐色、外面は橙色を呈す。調整は内外面ともユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精緻で直径１㎜前後の長石を含む。

３～５はＡトレンチのピット１から出土した。

３は瓦器椀で、口径12.0cm、残存高2.7cmで内外面とも灰色を呈す。調整は内面ヘラミガキ、外面はユビオサエ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精緻である。

４は瓦器小皿で口径7.0cm、残存高0.8cmで内外面とも灰色を呈す。調整は外面ユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、低部に指頭圧痕がみられ、胎土は精良である。

５は瓦器椀の底部で、底部径4.0cm、残存高0.7cmで内面は灰色、外面は灰白色を呈す。調整は外面ナデ、底部外面は一定方向のナデ、内面は磨滅が著しいがナデと観察される。貼付高台はつまみ上げで成形している。胎土は精良で焼成も良好である。

６～９と13～15はＡトレンチの土坑から出土した。

６は土師皿で、口径8.5cm、器高1.3cmで内外面ともにぶい黄橙色を呈す。調整は内面ナデで一

部にユビオサエがみられ、外面はユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精緻で直径２～３㎜の長石をわずかに含む。

７も土師皿で、口径8.8cm、器高1.3cmで内外面ともにぶい黄橙色を呈す。調整は内面ナデ、外面はユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精緻である。

８も土師皿で、口径8.0cm、器高1.2cmで内外面ともにぶい橙色を呈す。調整は内面ナデ、外面はユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精良で直径0.5㎜前後の長石を含む。

９も土師皿で、口径5.8cm、器高1.9cmで内面は灰白色、外面は浅黄橙色を呈す。調整は内面ナデ、外面はユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精緻である。

13も土師皿で、口径14.6cm、器高3.3cmで内面はにぶい褐色、外面は明褐色～にぶい橙色を呈す。調整は内外面ともユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は直径２～５㎜の長石を多く含むが精良で焼成も良好である。

14は瓦器椀で、口径14.4cm、残存高4.7cmで内外面とも灰色を呈す。調整は内面と外面の上半はヘラミガキ、外面底部にかけてユビオサエのあとナデで、口縁内面には段に近い沈線が１条みられる。胎土は精緻で焼成も良好である。

15は緑釉陶器の底部で、底部径6.0cm、残存高1.6cmで内外面ともオリーブ灰色を呈す。内外面とも施釉されているが、高台部分は剥離している。なお、高台は貼付の輪高台である。胎土は精緻で焼成も堅硬である。

10～12はＡトレンチのピット一括で取り上げた遺物である。

10は土師皿で、口径16.0cm、残存高3.3cmで内面は灰白色、外面は浅黄橙色を呈す。調整は内面ナデ、外面はユビオサエのあとナデ、口縁部付近はヨコナデ、胎土は精良である。

11は瓦器椀で、口径13.5cm、残存高3.5cmで内外面とも灰色を呈す。調整は磨滅のため内面は観察できず、外面はユビオサエ、口縁部付近はヨコナデで、口縁内面には段に近い沈線が１条みられる。胎土は精緻でわずかに長石を含む。

12は瓦器椀の底部で、底部径4.8cm、残存高1.3cmで内外面とも灰色を呈す。調整は内面ナデ、外面の底部付近は回転ナデ、貼付高台もナデで調整している。胎土は精緻で焼成も良好である。

16はＤトレンチの土坑から出土した土釜で、鍔径は推定約40cm、残存高11.7cmで内外面とも灰白色を呈す。調整は内外面ともナデ、鍔部はヨコナデで、胎土は精緻、焼成は良好である。

Ⅲ　まとめ

今回の調査は地下遺構の有無を確認し、遺構が検出され本調査が必要となった場合の調査期間と経費算定のための資料を得ることを目的に実施した。その結果、Ｃトレンチ以外は素掘小溝等の遺構が検出され、なかでもＡトレンチにおいてはその下層で土坑や完形の土師皿が出土したピット等が検出された。Ｄトレンチにおいても素掘小溝の下層から不整形な土坑や、土坑に切られたピットが検出された。

まず、Ａトレンチでもっとも古いと考えられる遺構はピット３で、底から13世紀代と考えられる完形の土師皿が出土した。このピット３の上層に方形落ち込みがあり、この落ち込みを切って土坑が掘られている。この土坑は出土遺物から概ね14世紀代と考えられる。なお、この土坑の上層で検出された素掘小溝やその上層に堆積していた包含層からは縄文時代と考えられる石匙や飛

鳥時代の須恵器片が出土しているが、中世以前にさかのぼると考えられる遺構は検出されなかった。したがって、素掘小溝下層で時期が確定できる遺構はすべて13世紀以降である。また、Dトレンチで土釜が出土した土坑も素掘小溝下層で検出したことから、このトレンチでは古い時期の遺構と判断される。この土釜の時期については鍔部付近の破片のため確定し難いが、ほぼ15世紀代と推定される。

したがって、今回の事業地周辺は概ね13世紀以降に開発が進んだと想定され、それ以前の遺物については後世の整地等の造成によって二次的に移動してきたと考えられる。

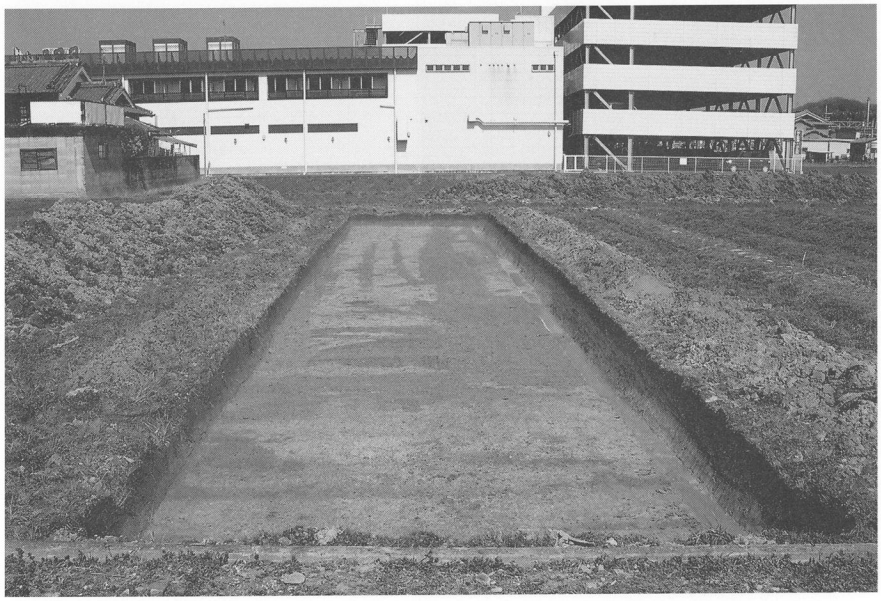
最後に、今回の試掘確認調査について、調査面積は狭いがほぼ事業地全体を把握できた。事業地の中央付近は近代に瓦の粘土採掘で遺構が完全に破壊されており、北側より南側の方が遺構密度が高い状況が確認された。しかし、検出した遺構は素掘小溝を中心にピットや土坑のみであり、掘立柱建物等が復元され付近に集落の存在を想定できる状況ではなかった。したがって、本調査を実施しても今回以上の成果は期待できないと考えられ、本調査は不要と判断される。

参 考 文 献

香芝市教育委員会編　2003　『尼寺廃寺Ⅰ』香芝市教育委員会

香芝市教育委員会編　2005　『平野２号墳』香芝市教育委員会

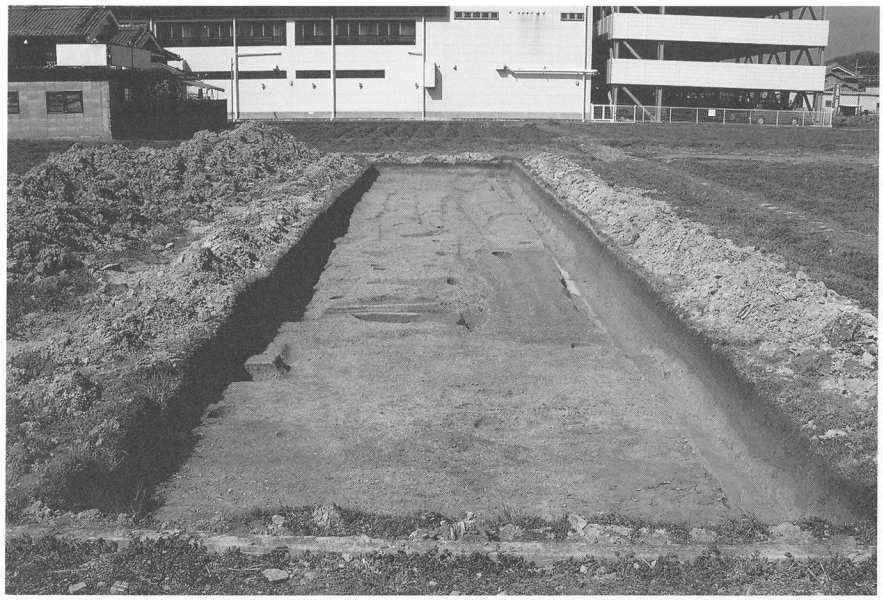
調査前（南から）



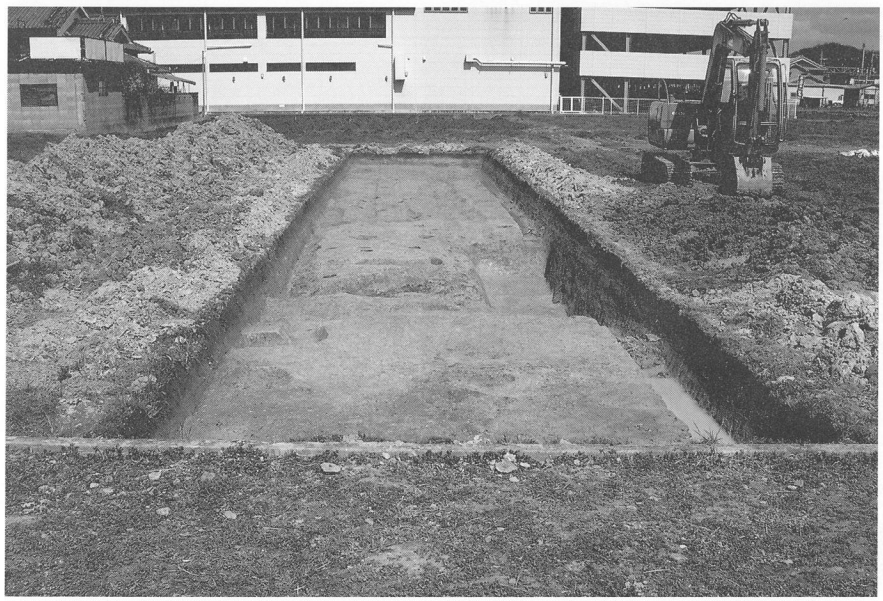
遺構検出状況（南から）

土坑・落ち込み検出状況（南東から）

図版2　Aトレンチ

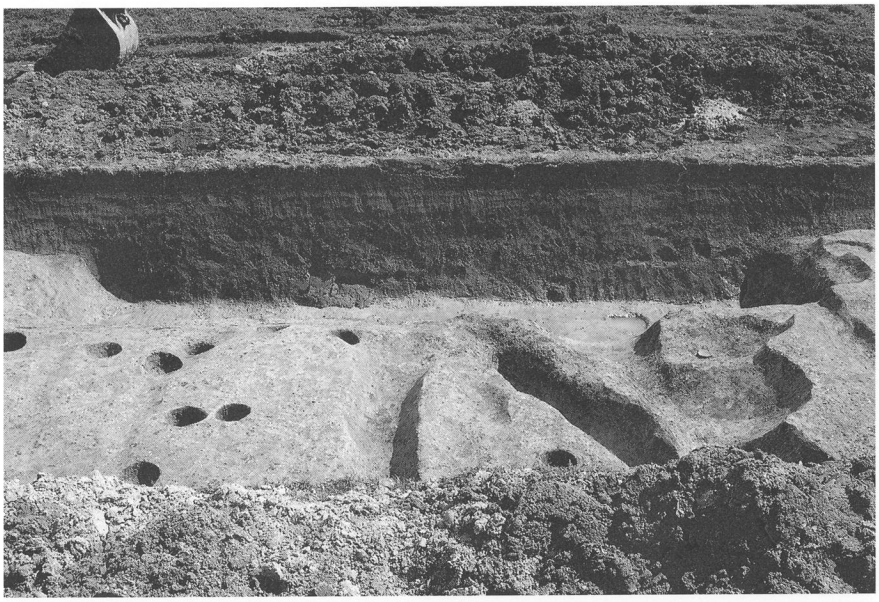


上層遺構完掘状況（南から）

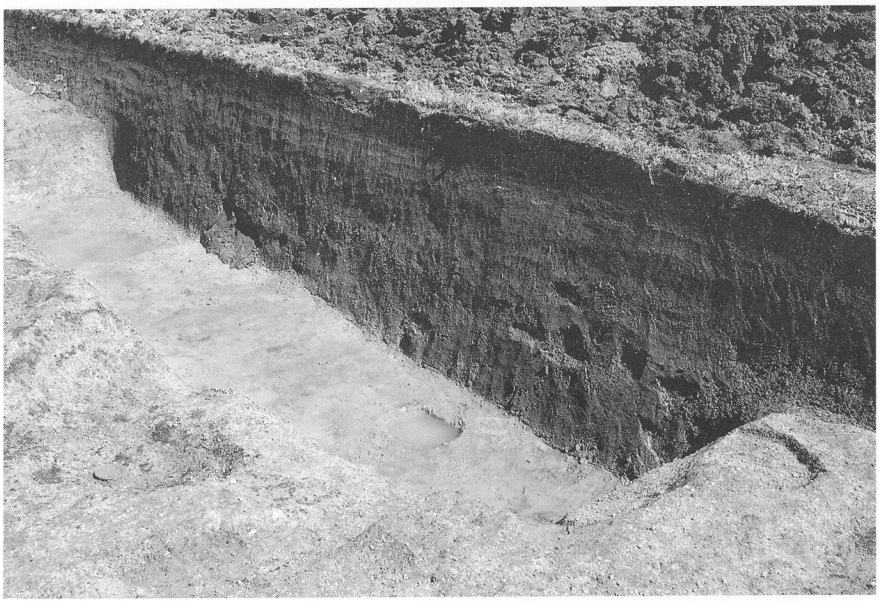


完掘状況（南から）

落ち込み下層の溝（西から）



土坑・落ち込み完掘状況（西から）



土坑全景（南西から）

ピット３土師皿出土状況（西から）

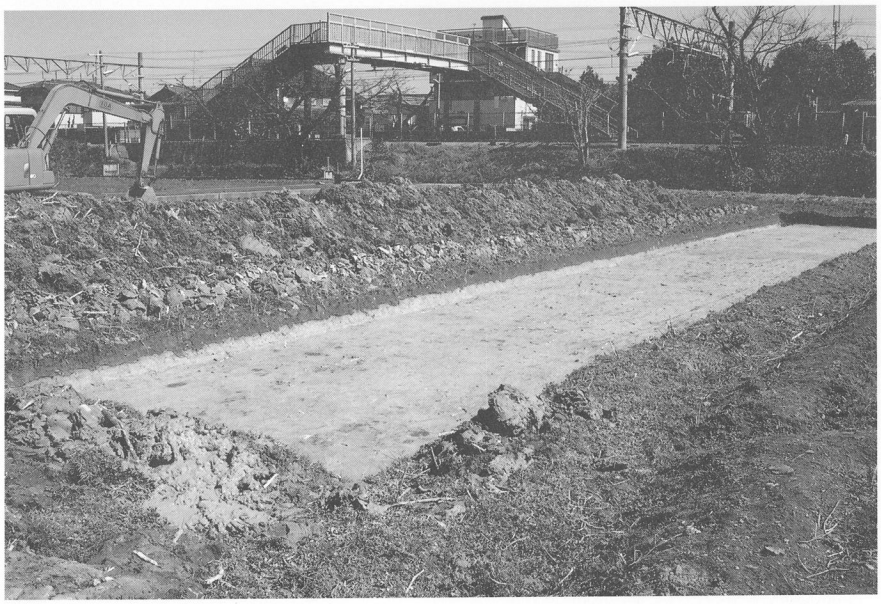
図版4　Bトレンチ

遺構検出状況（西から）

弧状の溝（南東から）

調査後（西から）

トレンチ全景（西から）



同（南西から）

調査後（西から）

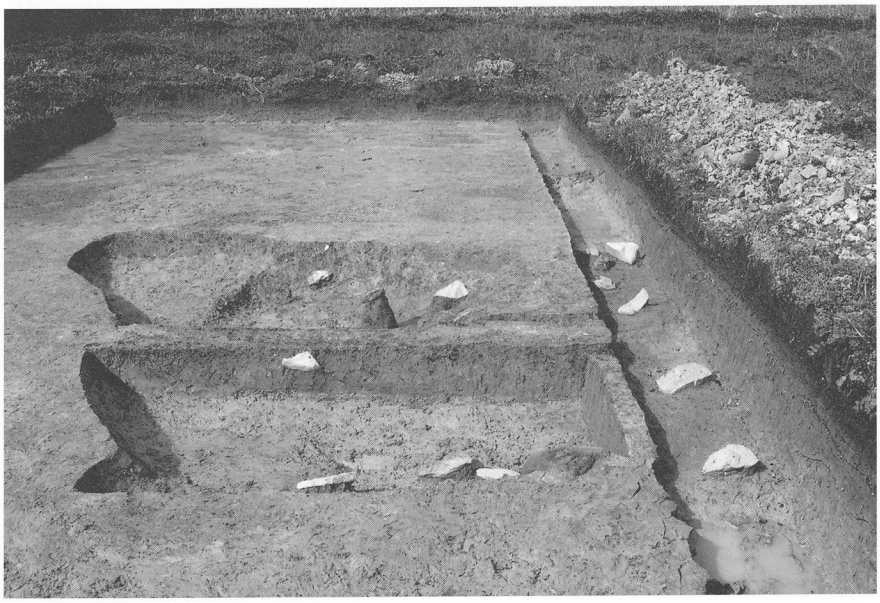
図版6　Dトレンチ

遺構検出状況（南から）

土坑検出状況（南西から）

土坑全景（西から）

土坑全景（北西から）



同（南から）

同（南西から）

図版8　Dトレンチ

土坑遺物等出土状況（北から）

同土釜出土状況（北西から）

調査後（南から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどかしばしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう　にじゅうさん
書　名	平成18年度香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　23
副書名	
巻　次	
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	23
編著者名	山下　隆次
編集機関	香芝市教育委員会
所在地	〒639-0292　奈良県香芝市本町1397番地　TEL 0745-76-2001
発行年月日	西暦2007（平成19）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
みめいめいさんぷち 未命名散布地	奈良県香芝市 上中140-2他	292109		34度 33分 41秒	135度 42分 04秒	20070226 ～ 20070309	400㎡	範囲確認

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
未命名散布地	散布地	中世	素掘小溝 土坑 ピット	サヌカイト製石器、 土師器、須恵器、 瓦器等	素掘小溝や土坑、ピット等の遺構が検出されたが、全体として遺構が希薄であり本調査の必要はないと判断される。

要　　約	遺跡有無確認踏査によって遺物が採集され、区画整理事業計画における道路予定地部分を中心に４ヶ所トレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、素掘小溝のほか土坑やピット等の遺構が検出された。これら遺構の性格としては農耕等に伴う可能性が高く、住居跡などまとまりのある遺構は皆無であった。また、遺構も13世紀以降と考えられ、古代にさかのぼるものもなく、全体として遺構密度も希薄であることから本調査の必要はないと判断される。

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報　23

－平成18年度－

2007(平成19)年３月31日

編集・発行　奈良県香芝市教育委員会

〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地

TEL. 0745-76-2001　FAX. 0745-78-9150

印　　刷　堀内印刷株式会社

〒635-0067 奈良県大和高田市春日町１丁目９－10

TEL. 0745-52-0557　FAX. 0745-23-2330